

2026 年 8 月 14 日

インド・7月インフレ率は+4.45%と目標(中央値)を上回る(Asia Weekly)

～マレーシア、シンガポールの 4-6 月 GDP はともに上方改定～

経済調査部 主席エコノミスト 西濱 徹

(TEL : 050-5474-7495)

(経済指標の振り返り)

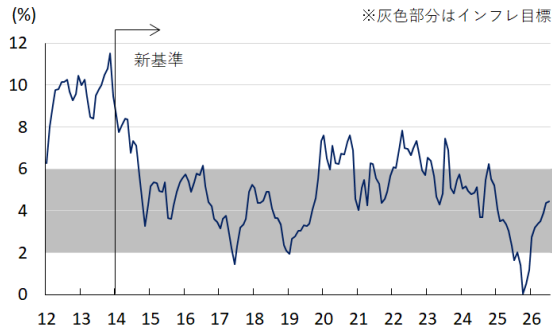
発表日	指標、イベントなど	結果	コンセンサス	前回
8/9(日)	(中国)7月消費者物価(前年比)	+0.5%	+0.8%	+1.0%
	7月生産者物価(前年比)	+3.5%	+3.8%	+4.1%
8/11(火)	(シンガポール)4-6月実質GDP(前年比・改定値)	+5.9%	+5.8%	+5.7%*
	(マレーシア)6月鉱工業生産(前年比)	+6.5%	+7.0%	+8.5%
	(オーストラリア)金融政策委員会(政策金利)	4.35%	4.35%	4.35%
8/12(水)	(韓国)7月失業率(季調済)	2.8%	--	2.7%
	(インド)7月消費者物価(前年比)	+4.45%	+4.50%	+4.38%
8/14(金)	(マレーシア)4-6月実質GDP(前年比・改定値)	+6.0%	+5.8%	+5.8%*

(注) コンセンサスは Bloomberg 及び THOMSON REUTERS 調査。灰色で囲んでいる指標は本レポートで解説を行っています。

[インド]～原油高一服の影響が出るも、食料品のほか、一部のサービス分野などでインフレ圧力が残る～

12日に発表された7月の消費者物価は前年同月比+4.45%となり、前月(同+4.38%)から加速し、2ヵ月連続でRBI(インド準備銀行)が定める目標レンジ(4±2%)の中央値を上回る伸びとなった。前月比は+0.88%と前月(同+1.03%)から上昇ペースがわずかに鈍化しており、原油価格の上昇一服を受けてエネルギー価格の上昇ペースが鈍化する一方、穀物や生鮮品をはじめとする食料品価格は上昇ペースを強めるなど、生活必需品の物価はまちまちの動きをみせている。なお、食料品とエネルギーを除いたコアインフレ率は前年同月比+3.86%となり、前月(同+3.89%)からわずかに伸びが鈍化した。前月比も+0.26%と前月(同+0.33%)から上昇ペースが鈍化しており、エネルギー価格の上昇一服を受けて輸送コストの上昇ペースが鈍化したほか、金融市場におけるルピー安の動きに一服感が出たことも重なり、輸入物価による押し上げ圧力も弱まっている。一方、サービス物価は引き続き緩やかに上昇しており、一部ではインフレ圧力が根強く残っている様子がうかがえる。

図 1 IN インフレ率の推移

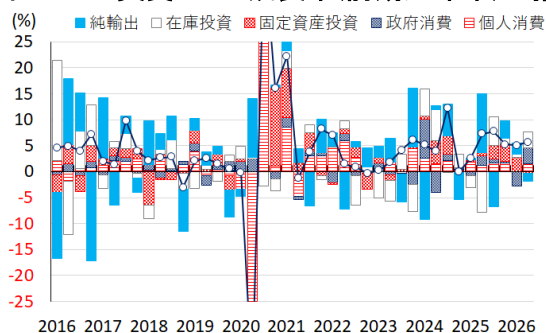


(出所)CEIC より第一ライフ資産運用経済研究所作成

[シンガポール]～AI・半導体関連輸出が景気をけん引も、景気実態と数字に乖離が生じている可能性～

11日に発表された4-6月の実質GDP成長率(改定値)は前年同期比+5.9%となり、先月発表された速報値(同+5.7%)から上方改定された。前期比年率ベースの成長率も+5.73%と、速報値(同+4.61%)から上方改定された。業種別では、建設業の生産がわずかに下方修正された一方、製造業やサービス業の生産が上方修正されたことが全体を押し上げた。世界的なAI(人工知能)・半導体関連投資の旺盛さを背景に、輸出は堅調に推移している。イラン情勢の悪化に伴う原油高などを背景としたエネルギー価格の上昇によるインフレ圧力にもかかわらず、個人消費は底堅い動きをみせている。加えて、政府による景気下支え策の進展が政府消費を押し上げている。一方、世界経済の不透明感や金融市場の混乱を受け、企業部門の設備投資意欲は力強さを欠いており、固定資本投資は頭打ちとなった。なお、在庫投資の成長率寄与度は前期比年率ベースで+3.18ptと大幅なプラスになったと試算される。このため、GDP成長率の数字が示すほど景気実態は強くない可能性があり、両者の乖離に留意する必要がある。

図 2 SG 実質 GDP 成長率(前期比年率)の推移



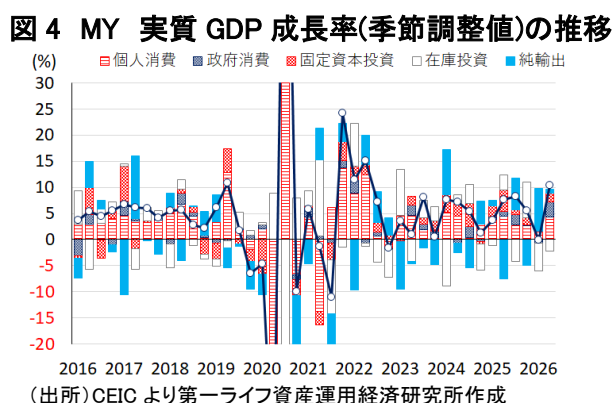
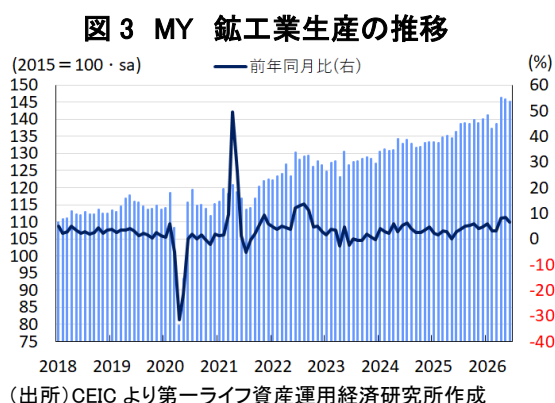
(出所)CEIC より第一ライフ資産運用経済研究所作成

[マレーシア]～世界的な AI・半導体関連投資が外需をけん引、内需の堅調さも景気を押し上げる展開～

11日に発表された6月の鉱工業生産は前年同月比+6.5%となり、前月(同+8.5%)から伸びが鈍化した。前月比は▲0.50%と前月(同▲0.35%)に続いて2ヵ月連続で減少しており、これまで続いてきた持ち直しの動きに変化の兆しが出ている。分野別では、原油高の一服などを背景に原油や天然ガスなど鉱業部門の生産に下押し圧力がかかる一方、製造業の生産が拡大したほか、経済活動の動向に連動する発電量も増加に転じるなど、持ち直しの動きが確認されている。製造業では、

主力輸出財である半導体など電子部品関連や電気機械関連の生産が引き続き旺盛に推移するとともに、自動車など輸送用機械関連の生産も堅調なほか、石油化学関連の生産も活発に推移するなど、幅広い分野で生産拡大の動きがみられる。

14日に発表された4-6月の実質GDP成長率(改定値)は前年同期比+6.0%となり、先月発表された速報値(同+5.8%)から上方改定された。前期比年率ベースの成長率も+10.47%と前期(同▲0.11%)から2四半期ぶりのプラス成長に転じるとともに、4年ぶりの高い伸びとなった。世界的なAI(人工知能)・半導体関連投資の活発化を背景に輸出が拡大ペースを強めるとともに、データセンター関連投資の活発さを反映して固定資本投資も堅調に推移している。イラン情勢の悪化を受けた原油高にもかかわらず、燃料補助金などの政府支援を背景にインフレ率は比較的落ち着いた推移が続いており、個人消費も堅調な動きをみせているほか、政府消費の拡大も景気を押し上げている。産業別では、異常気象の影響により農林漁業関連の生産が下振れする展開が続く一方、鉱業、製造業、建設業では軒並み生産が大幅に拡大し、景気を押し上げている。在庫投資の成長率寄与度は2四半期連続のマイナスと試算されるなど在庫調整が進む動きもみられることから、足元の景気実態は表面的な成長率以上に良好と捉えられる。

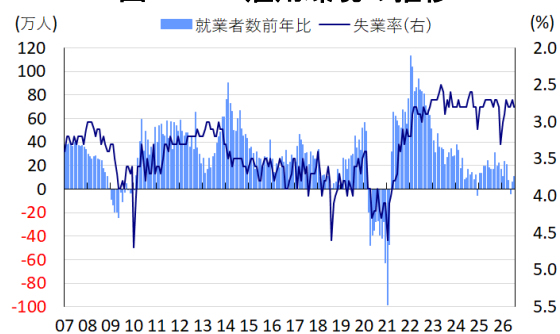


[韓国]～高齢層で労働市場への参入意欲が高い一方、若年層を取り巻く雇用環境は厳しさが続く～

12日に発表された7月の失業率(季調済)は2.8%となり、前月(2.7%)から0.1pt悪化した。失業者数は前月比+3.9万人と、前月(同▲2.6万人)から2ヵ月ぶりの増加に転じており、中期的にも増加傾向で推移している。年代別では、50代や60代以上の高齢層で減少する一方、20代を中心に増加しており、年代ごとのばらつきが鮮明になっている。一方、雇用者数は前月比+5.3万人と、前月(同+6.6万人)に続いて2ヵ月連続で増加しており、中期的な基調も増加傾向に転じている。雇用形態別でも、正規雇用、非正規雇用ともに増加する動きが確認されている。ただし、年代別では、50代や60代以上の高齢層を中心に雇用が拡大する一方、20代や40代では減少する動きが確認されている。労働力人口は前月比+0.9万人と、前月(同+0.4万人)に続いて2ヵ月連続で増加しており、労働市場への参入意欲が高まる動きがみられる。年代別では、50代や60代以上の高齢層で増加ペースが加速しており、高齢層の労働意欲の高さがうかがえる。その結果、労働参加率は64.6%と、前月(64.4%)から0.2pt上昇している。ただし、10代や20代などの若年層に限定した失業率は6.9%と、前月(6.5%)から0.4pt悪化したと試算されるなど、若年層を取

り巻く雇用環境は急速に厳しさを増していることに注意する必要がある。

図 5 KR 雇用環境の推移



(出所)CEIC より第一ライフ資産運用経済研究所作成

以 上